

在沖米軍基地問題をめぐる性暴力の表象

——地方紙の社説の分析より——

玉城 福子

1 目的

本報告では、沖縄において性暴力の事件が在米軍基地問題との関連でどのように語られるのかを明らかにすることを目的とする。1995年9月4日に起きた少女に対する3名の米兵による集団レイプ事件をきっかけに、日米地位協定のあり方や沖縄の過剰な基地負担に対し大規模かつ長期的な反基地運動が始まった。他方、Angstは1995年の事件後、沖縄社会やメディアの関心が、一人の少女の被害から次第に基地問題へ収斂していったことを批判している（Angst 2001）。こうした傾向がその後も続いているのか、どのように語られているのか詳細な分析を行った研究はこれまでない。しかし、Angstの指摘は性暴力への社会問題化やメディアの報道のあり方を考える上で重要な指摘である。

2 方法

そこで、沖縄の地元紙である沖縄タイムスの性暴力事件に言及のある205件の社説を分析対象として、内容分析を行なった。対象時期を反基地運動の高まった1995年の事件以降とし、記事の選定にあたっては、性暴力に関わるキーワードを設定し、タイトルと本文に特定のキーワードが含まれているかどうかを基準とした。分析では、田間泰子が子殺しと中絶に関する新聞報道の分析で用いた「時間的拡大」と「空間的拡大」、「カテゴリー統合」という概念を用いた（田間 2001）。田間は、一つの事件が語られる時、他の事件が同じカテゴリーの出来事として位置づけられることで、「ことの大きさが拡大される」と指摘する（田間 2001）。

3 結果

分析の結果、対象の205件の社説のうち加害者不在の件数は78件であり、122件の社説では加害者に言及していた。加害者として最も多く言及されているのが、「米兵」の72件である。次に多いのが「教員」であり15件であった。続いて、「政治家」と「少年」がそれぞれ9件、「元受刑者」が8件、「日本軍・日本政府」4件、「自衛官」3件となっている。さらに、過去の事件が持ち出される等の「時間的拡大」や海外での性暴力事件等について言及する「空間的拡大」が見られる一方で、「カテゴリー統合」によって在沖米軍基地問題に収斂していく傾向が見られた。また、過去に起きた事件の中でも95年の少女強姦事件が象徴的な意味を持って用いられていた。

4 結論

以上から、沖縄では、米兵による性暴力事件がニュースバリューのあるトピックとして存在しており、1995年以降の事件に関しても、個人の被害が米軍基地問題として焦点化される傾向が継続していると結論づけた。性暴力事件を社会問題化する手順が他の地域と比べて整っていると言える一方、性暴力被害が政治的に利用されているという側面も有していると言える。米軍基地があるが故に起きる事件を批判しつつも、被害者を蔑ろにしない道を考える必要がある。

文献

- Angst Linda Isako, 2001, “The Sacrifice of a School Girl— the 1995 Rape Case, discourses of power, and women’s live in Okinawa”, *Critical Asian Studies*, pp.243-266
田間泰子, 2001, 『母性愛という制度——子殺しと中絶のポリティクス』 勁草書房。